

# 日本ビジネス実務学会 会報 81 号

Bulletin of the Japan Society of Applied Business Studies, No. 81

発行日/2024年9月30日発行  
編集/日本ビジネス実務学会(広報委員会)  
事務局/〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5 東京工芸大学内  
URL: <https://www.jsabs.gr.jp/>

## 《第43回全国大会(広島県)詳細号》 会長あいさつ

### 「新たなステージへ ～研究の深化と拡大～」 会長 大島 武(東京工芸大学)



ギリギリした真夏の太陽をこよなく愛する自分が61歳にして初めて「いい加減に終わってほしい」と切に願うような酷暑でした。

皆様、お変わりなくお過ごしでしょうか。

さて、本学会の最大イベントである全国大会は、6月に広島県の安田女子大学で開催されました。学びの多い非常に充実した内容で、大会実行委員長の金岡敬子先生、会場校、ご尽力いただいた実行委員の先生方に心より厚く御礼申し上げます。

プログラムの詳細は次頁以降に譲りますが、私が感動し、ここで触れたいのは、2日目の学会奨励賞授賞式の模様です。受賞された先生方のコメントは謙虚で前向き、そして皆さま口を揃えて「セミナーなど学会での学びが大いに役に立った」と言ってくれました。統計手法や質的研究などをテーマに近年実施してきた学会セミナーで基礎を学び、その手法を各研究者が自分のテーマの中で深化させていることが見て取れました。新しく入会された先生方が本学会で求めている研究水準を知るといっても一種理想的なサイクルになっているのではないかと感じます。今後もこうしたセミナー、イベントを企画し、学会の充実に役立てたいと思います。

8月には秘書サービス接遇教育学会第30回研究大会にビジター参加してきました。こちらは日本秘書教育学会を一方のルーツとしており、本学会と両方でご活躍の先生も少なからずいらっしゃいます。基調講演、研究発表を聴き、情報交歓会に参加して感じたことが一つありました。それは、会員はそれぞれ研究テーマを異にしながらも、検定試験の指導という一種の共通言語を持っているという点です。

日本ビジネス実務学会の研究領域は広く、それゆえ今後大きな発展、拡大の可能性を持っています。ただ同時に広すぎて焦点がぼやける危険性もあるわけで、やみくもに会員増だけを目指すことが学会の発展に直結するとも限りません。今後は、先生方の興味関心に合わせた、研究テーマ別の分科会のようなものを作ることも検討いたします。

いずれにせよ、学会の運営に絶対的な正解はなく環境の変化や会員の皆様のお声を耳を傾けながら、少しずつ改善していくしかないと思っております。

何かお気づきの点などがありましたら、いつでもお気軽にご意見をお寄せください。

会長宛直メール ([t\\_oshima@bas.t-kougei.ac.jp](mailto:t_oshima@bas.t-kougei.ac.jp))も歓迎いたします。

#### CONTENTS

会長あいさつ	1
全国大会を終えて(大会実行委員長・事務局長あいさつ)	2
第43回全国大会プログラム・講演会報告・学会奨励賞受賞報告	3-8
口頭発表概要	9-13
2023年度総会報告	14-15
2023年度決算報告・2024年度予算	16
役員体制・新入会員紹介・事務局連絡・第44回全国大会案内	17

## 大会実行委員長あいさつ

### 「第43回全国大会を終えて」

実行委員長 金岡 敬子（山陽女子短期大学）



第43回全国大会は、中国・四国ブロックが担当し、6月8日（土）9日（日）の2日間にわたり、広島市の安田女子大学・安田女子短期大学で開催いたしました。

統一テーマとして「Society5.0時代を見据えたビジネス実務」を掲げ、1日目の特別講演では、株式会社ネクストビジョンの有馬猛夫氏から統一テーマの実務教育について、これまでの経験則では対応できない勢いで変化を続けるビジネス環境における、教育現場や企業での取り組みについて多くの貴重な提言がありました。午後からの研究発表では20件の口頭発表が行われました。統一テーマに関連した内容と共に今後のビジネス実務教育の新たな方向性を探るべく研究領域も幅広く、口頭発表会場では活発な質疑応答が行われ、それぞれの問題意識から学びを深めました。

また、2日目の特別講演では、経済産業省中国経済産業局の菊地雄太氏による「Society5.0の中で最先端テクノロジーがもたらす変革とシンギュラリティを見据えた教育」についての講演を行いました。その分野で学会をリードしてくださっている見館好隆先生に進行をお願いし、質疑応答も活発に行われました。

2日間の締めくくりには、新会長大島武先生にご講演をしていただきました。

2020年から新型コロナウイルス感染防止のためオンライン開催が続き、昨年は4年ぶりに対面で開催されましたが、その実施方法については昨年度の実行委員長樋口勝一先生より詳細な情報をいただきました。

今回の大会開催にあたり、実行委員の人数が少ないことから、昨年度同様可能な限り簡素化を継続して実施いたしました。また、会長・担当理事と密に連絡を取り、都度確認をしながら進めることで、開催日を迎えることができました。ありがとうございました。

今大会も懇親会に代わり「情報交換会」を実施しましたが、交流の場として多くの方々にご参加いただき、教育情報促進の機会となりました。

無事開催することができましたのも、ひとえに会長をはじめ、役員、会員、協賛企業の皆様、そして実行委員の皆様方のおかげと感謝申し上げます。また、会場校として格段のご配慮を賜りました安田女子大学・短期大学様、お忙しい中ご準備・運営にご尽力くださりありがとうございました。そしてご参加くださったすべての方々にご心より感謝申し上げます。

結びに、1999年安田女子短期大学の開催では、奇しくも主人が事務局長をしており、準備の大変さを傍から見ておりましたので、この度、事務局長立花知香先生のご尽力には改めて紙面を借りて感謝申し上げます。また、実行委員長として多数の至らぬ部分がありましたこと、この誌面を借りてお詫び申し上げます。

## 大会事務局長より

### 「中国・四国ブロックからの大会御礼」

事務局長 立花知香（安田女子大学・安田女子短期大学）



当地広島での全国大会にお運びくださった皆様、大会運営にご協力くださいました皆様、協賛企業様、まことにありがとうございました。温かい皆様に支えられた大会は、何とか無事に全日程を終えることができました。

大会には64名にご参加いただきました。参加申し込みはPeatixを利用しました。担当の四国大学短期大学部の片山友子先生と加渡いづみ先生がきめ細かく作業進めてくださいました。研究発表や要旨集担当の名和晋也先生（鳥取短期大学）と佐々木公之先生（中国学園大学）は、20組の研究発表を取りまとめ、要旨集のデータ化を実現されました。これらの事務業務のスリム化推進で、運営はかなりスムーズでした。広島女学院の吉田順子先生には特別講演会の段取りからTeams立ち上げに至るまでありとあらゆる仕事を担っていただきました。中国四国ブロック会員は広範囲に散らばっていますが、遠隔で進行

する仕事を俯瞰しコントロールされたのが堀口誠信先生（徳島文理大学短期大学部）でした。実行委員長の金岡敬子先生（山陽女子短期大学）のもと、それぞれの分担業務を快く迅速にこなされるので、本当に心強かったです。皆様、お疲れ様でございました。

一方、自身の仕事を振り返ると、行き届かない点が多くありました。会場については、アンケート調査でも言及されていましたが、オンライン化を推進するのであればWi-fi環境の整備を考慮すべきでした。今後の課題とさせていただきます。

さて、過去、本学で大会が開催されたのは1999年第18回大会です。開催校名は安田女子短期大学で、秘書科総出の一大イベントだったようです。現在は秘書科も無くなり、今年度で短期大学入学募集も停止になりました。本学会に入会を勧めてくださった先生方と共に開催するつもりで、この度の開催校名は、安田女子大学・安田女子短期大学と併記いたしました。お陰様で次回へのバトンを繋ぐことができそうです。

# 大会プログラム

【1日目】6月8日(土)					
時刻	プログラム				会場
9:30～10:00	受付(荷物置場は1号館3階1303教室)				1号館1階アリーナ
10:00～10:10	開会宣言・大会実行委員長挨拶・日程説明等				1306教室
10:20～11:00	日本ビジネス実務学会総会				同上
11:00～12:00	特別講演「Society5.0時代を見据えたビジネス実務教育」 講師：株式会社ネクストビジョン 代表取締役社長 有馬猛夫氏				同上
12:00～13:10	昼食休憩(出版社展示開始 於1号館3階ラウンジ)				1305・1306教室
研究発表					
教室	A会場(1307教室)	B会場(1308教室)	C会場(1309教室)	D会場(1310教室)	1号館3階ラウンジ
座長・副座長	湯口恭子(近畿大学) 坂本理郎(大手前大学)	小松由美(目白大学短期大学部) 坪井明彦(高崎経済大学)	千葉里美(北海商科大学) 手嶋慎介(愛知東邦大学)	河合晋(岐阜協立大学) 福井就(大手前学園)	
13:10～13:40	◎アフターコロナにおける外部との関わりや協力について学ぶ「フェアトレードショップ運営」 [1] 石田もとな(鹿児島女子短期大学)	◎コミュニケーション能力育成に繋がる敬語教育の考察 [6] 杉本あゆみ(元金沢学院短期大学)	◎Society5.0の視点から見た実践と理論の結びつき：Eduinformaticsと機関研究をもとにした日本ビジネス実務学の探究 ※[11] ○高松邦彦(東京工業大学)	インターンシップ中に学生が困難を感じる要因とその乗り越え方の分析と考察 [16] 牛山佳菜代(目白大学)	出版社展示 2日目 正午まで
13:50～14:20	◎新三省合意に対応した「タイプ2」型産学連携教育の開発と実践 [2] 吉川正剛(大手前大学)	◎若手人材が「教える」こととキャリア形成ー京都花街芸妓の事例ー [7] 西尾久美子(近畿大学)	◎大学IRにおけるアンケート調査業務支援：社会心理学に基づく課題の分析と対策の試み ※[12] ○松本清(東京工業大学)	技能実習生制度廃止および育成就労制度新設に対する今後の外国人労働者と大学生との交流の在り方について [17] 見館好隆(北九州市立大学)	
14:30～15:00	◎短期大学生におけるアクティブラーニング型授業での学修成果について [3] 上岡史郎(目白大学短期大学部)	◎女性管理職の一皮むけた経験ー岩田屋三越の事例研究ー ※[8] ○徳永彩子(熊本学園大学)	◎小規模私立大学の教職員におけるデータ活用人材の育成に向けた分析フローの検討 ※[13] ○大須賀元彦(中京学院大学)	大学生のリーダーシップ観について：リーダーシップ教育の観点から [18] 佐野達(拓殖大学)	
15:00～15:20	休 憩				
15:20～15:50	◎双方型遠隔教育におけるデザイン思考演習の指導法と成果物の評価 ※[4] ○川瀬真弓(岐阜大学)	◎企業秘書の感情労働に関わる要因ーテキスト分析によるコーディングルールの作成ー [9] 周藤亜矢子(茨城女子短期大学)	マナーリテラシー教育プログラム開発に向けた展望と課題 ※[14] ○堂野崎融(九州共立大学)	新規開講科目「トランジション論」の事例紹介 [19] 岩井貴美(近畿大学)	
16:00～16:30	学生のキャリア形成とSTEAM教育の連携における課題 [5] 森谷一経(開智国際大学)	学問分野と職業能力のチューニングによるビジネス実務の再考 [10] 江藤智佐子(久留米大学)	大学間相互連携による地域連携活動に関する共同教育プログラムの検証 ※[15] ○西川三恵子(九州共立大学)	生成AIによるビジネス実務への対応の可能性～ChatGPTによる秘書技能検定3級問題正答率の分析～ [20] 樋口勝一(甲子園大学)	
16:30～16:40	事務連絡(各会場)				
16:50～18:00	情報交換会 1305教室				

〈研究発表の共同発表者〉

※[4] 森部絢嗣〔岐阜大学〕、鎌部浩〔岐阜大学〕

※[8] 所吉彦〔岐阜協立大学〕

※[11] 松本清〔東京工業大学〕、今井匠太郎〔東京工業大学〕

※[12] 高松邦彦〔東京工業大学〕、今井匠太郎〔東京工業大学〕

※[13] 富田宏〔中京学院大学〕、須栗大〔中京学院大学〕

※[14] 加納輝尚〔昭和女子大学〕、手嶋慎介〔愛知東邦大学〕

※[15] 手嶋慎介〔愛知東邦大学〕、堂野崎融〔九州共立大学〕、大須賀元彦〔中京学院大学〕

○主発表者

◎学会奨励賞エントリー発表

【2日目】6月9日(日)		
時刻	プログラム	会場
9:00～9:30	受付	1号館1階77ナ
9:30～10:30	講演：「Society5.0時代の中で最先端テクノロジーがもたらす変革とシンギュラリティを見据えた教育」 講師：経済産業省 中国経済産業局 菊池 雄太 氏	1306 教室
10:30～10:45	休憩	
10:45～11:15	講演：新会長 大島 武 先生	同上
11:15～11:35	学会奨励賞発表・表彰式・閉会の辞	同上

### 情報交換会の様子

第1日目の午後4時50分から、会場校である安田女子大学・安田女子短期大学の1305教室にて開催されました。今年も昨年同様「情報交換会」で茶菓を囲みながらの交流となりました。大会にご出席くださいました方々が多くご参加くださり、久しぶりの対面での交流を楽しむことができました。終始とても和やかな雰囲気、それぞれ研究活動の話題に時間を忘れて意見交換をする機会となりました。



## 1日目 特別講演報告 「Society5.0時代を見据えたビジネス実務教育」 有馬猛夫氏（株式会社ネクストビジョン 代表取締役社長）



内閣府による第5期科学技術基本計画において、Society5.0は「サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会」として提唱され、変化を踏まえて具体化させていく必要があるとされて

いる中、本学会においても Society5.0 というキーワードはこれからの研究に欠かせない要素となっています。今回は広島県情報産業協会元会長でもあり、企業経営者として地域の情報産業界の第一人者でもある、有馬猛夫氏に Society5.0 時代の人材育成とビジネス実務教育について採用者側の立場でご講演いただきました。

講演内容は次の5編で構成されました。

はじめに有馬氏の経営する「株式会社ネクストビジョンの紹介」の中で自己紹介があり、経営者としての事業領域やDXの推進に向けた現状が語られました。

1編では、未来への仮説としてAIが進化していく中で社会問題の解決にはITの技術は欠かせないこと

から、最先端技術の紹介もありました。

2編では Society5.0 までの進化と超スマート社会の実現に向けて、人間中心社会のテクノロジーと共存する新しいライフスタイルについての提言がありました。

3編では大学教育についての提言があり、カリキュラムの再構築、インターンシップと企業連携の重要性、生涯学習の推進について具体的事例をもとに解説がありました。また、4編では企業における人材育成には①データサイエンスとAIの理解②チームワークとリーダーシップ③イノベーションの推進力として新しいアイデアを実行に移す力が大切であることを強調されました。5編では、新しい教育システムの提言として①教育DXの導入②単位・評価制度の見直し③未来を創る場所としての大学に、自律的に努力できる仕組みを作ること、などが語られました。最後に「未来を予測する最善の方法は、未来を創ることだ」というドラッカー教授の言葉を引用し、終始和やかな雰囲気での講演となりました。

会員の皆様にとって社会の変化に伴う社会的課題について、採用者側の提言が今後の研究の一助となればと願っております。（報告：金岡 敬子）

## 2日目 講演報告 「Society5.0の中で最先端テクノロジーがもたらす変革とシンギュラリティを見据えた教育」 菊地雄太氏（経済産業省中国経済産業局 デジタル経済課 総括係長）



生成AIやブロックチェーンを活用したWeb3.0（暗号資産、NFT等）、メタバースなど、最先端技術の進化が加速しており、こうした新しい技術が、これからの産業や社会にどのような変化をもたらすのかを知っておくことは重要です。

今回は、経済産業省中国経済産業局の菊地氏に、Society5.0時代を見据えたビジネス実務教育についてご講演いただきました。

講演内容は、次の3編で構成されました。

### 1. Web3.0・ブロックチェーンがもたらす金融の民主化

インターネットの進化は、新たな局面を迎え、誰でも情報発信を行えるようになったWeb1.0から、SNS等で誰でも情報発信、拡散、双方向のコミュニケーションを行えるWeb2.0の時代へ移行し、ビットコインの登場によって、情報を改ざんされずに所有できるというWeb3.0に移行しているということを、ブロックチェーンの仕組み等を含めて、解説いただきました。

また、暗号資産・ブロックチェーンを活用した新しいビジネスモデルや地方創生事例の紹介があった他、将来、「お金」の意味や会社等の組織の形態が変化する可能性が語られました。

### 2. AIがもたらす知の民主化

世界では、「AI時代の日本の未来が明るい」と考えられているという説明がありました。具体的には、日本文化がAIの受容性を高くしていたり、人口減少社会がかえってプラスに寄与する可能性、ものづくり大国日本が再び復活する可能性などの解説がありました。また、AIの影響を受けやすい仕事の解説の他、AI時代に重要なスキルとしてプロンプトエンジニアリングやデザイン思考等が重要であることが語られました。

### 3. これからの人類に求められるスキル

これからは、信用や共感力、課題発見力、デザイン思考等が重要となってゆき、テクノロジーの進化が、人として大事なことを守る、という人間本来の在り方や価値観をより強固にしてゆく可能性のあることが説明されました。新たな発想で教育活動を進めていく必要があると改めて考えさせられる時間となりました。（報告：金岡 敬子）

## 2日目 会長講演要旨 「日本ビジネス実務学会での学び」 大島 武（東京工芸大学）

今回の会長講演で2つのことをお話させて頂きました。

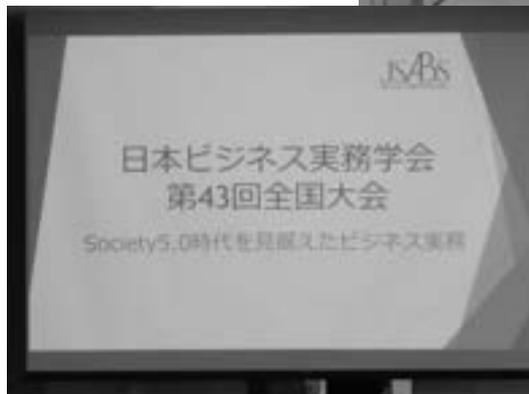
1つめは1996年、日本秘書学会が日本ビジネス実務学会に改称した年に入会して以来、自分が本学会でいかに多くのことを学び、先輩方に助けて頂いたかということです。33歳で短大講師に転身しましたが、企業経験と海外留学（MBA）での学びだけが頼りだった私は確固たる研究の方法論を持っていませんでした。日本ビジネス実務学会で多くの頼れる先生方から助言をもらい、共同研究のグループに入れて頂いたことで、少しずつではありますが成長を実感でき、本当に感謝しています。実際、今回改めてこれまでの仕事を見直してみたところ、自分の業績と言えるものの3割近くが本学会で知り合った先生方との共同研究でした。もう現役時代はあまり長くありませんが、少しでもこの御恩を次世代の先生方に還元できればと考えています。

次に「失敗から学ぶ」ことの重要性についてお伝えしました。これまでの経験の中で「我ながらうまくいった」という会心の授業、学生対応などが時々あります。しかし、その成功を別の機会に再現しようとしても、意外とうまくいかない。もしかしたら皆様にも似たような経験があるかもしれません。特

に対人業務の場合、同じコミュニケーションは決して再現できないわけですから、個々の成功体験から常に役立つ「鉄板の法則」を帰納的に導き出すことは不可能に近いと思われます。逆に「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」（松浦静山）の格言は、偶然の要素も大きい成功とは違い、失敗には必然的な原因がある（＝そこに改善のヒントがある）ことを教えてくれます。

そこで過去に私がやらかした生々しい失敗談を紹介し、その経験からどのような教訓が引き出せたかを説明しました。学生の心を傷つけてしまった話、授業中の何気ない一言に対するクレーム、自分のミスで学生がとんでもない過ちを犯してしまった話。生々しいエピソードは学会大会向きではなかったかもしれませんが、でも自分の失敗を振り返り、それを次に生かさなければ進歩はないと思います。経営学者の金井壽宏さんの言葉を借りれば「リフレクション（内省）をアクション（行動）につなげる」ということになるでしょうか。

講演後は特に失敗談について色々と感想を頂けて幸せでした。機会があれば、個々人の教育や研究における失敗事例を分かち合うワークショップができれば面白いと思います。



## 学会奨励賞（論文）受賞報告 1

柳田健太（近畿大学）  
「中小企業の IT 経営推進に向けた意思決定プロセスに関する研究  
—経営者へのインタビュー調査の分析—」



〔授賞理由〕 中小企業の IT 経営推進に向けた意思決定プロセスとその段階ごとの意思構造（概念とカテゴリー）を明らかにしたことは、IT 経営推進の効果的なアプローチ方法に寄与する内容であるとして、高く評価された。

〔本人感想〕 このたびの学会奨励賞の受賞について心より感謝申し上げます。本学会を通じて新たな研究アプローチや手法を学び、一つの論文としてまとめることができたことは、自らの自信にも繋がりました。今後も現状に満足することなく、さらなる研鑽を積み重ね、学会に貢献できるよう努めてまいります。

## 学会奨励賞（論文）受賞報告 2

湯口恭子（近畿大学）  
「ロールモデルが大学生のキャリア探索に与える影響  
—家族や友人・知人と、著名人・架空の登場人物とを比較して—」



〔授賞理由〕 大学生が将来を描きにくくなっている現在、キャリア形成上重要な変数であるロールモデルとキャリア探索に着目したものであり、従来言及されてこなかったロールモデルのタイプに関する論文として、高く評価された。

〔本人感想〕 学会奨励賞という名誉ある賞を受賞できたこと、心よりお礼申し上げます。発表の部に続き、論文の部でも受賞することができ、大変励みになりました。編集委員会の先生方をはじめ、ご指導いただいた査読者の先生方に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

## 学会奨励賞（研究発表）受賞報告 1

川瀬真弓（岐阜大学） 森部絢嗣（岐阜大学） 鎌部 浩（岐阜大学）  
「双方向型遠隔教育におけるデザイン思考演習の指導法と成果物の評価」



〔授賞理由〕 理系の学生の遠隔教育という点で面白さがあり、学生と評価者の両方からデータを取り、分析を丁寧に行っており、プレゼンに説得力があった。今後、結論をより明確にして、論文に繋げることを期待する。

〔本人感想〕 学会の統計セミナーを受講後、一步一步進めてきた研究を発表し、このたび名誉ある学会奨励賞を受賞できたことに深く感謝しております。発表の機会をくださった大会実行委員の先生方に心より御礼申し上げます。今後も一層の努力を重ね、研究に邁進してまいります。

## 学会奨励賞（研究発表）受賞報告2

西尾久美子（近畿大学）

「若手人材が『教える』こととキャリア形成—京都花街芸妓の事例—」



〔授賞理由〕花街という伝統的な世界を対象に、姉芸妓が妹舞妓を持つことの意味や教えることが姉芸妓のキャリア形成に与える影響を明らかにし、一般の会社における先輩社員と新人後輩の関係にも参考になるものである。

〔本人感想〕この度は学会奨励賞という栄誉ある賞を頂き、誠に光栄に思います。第43回全国大会で研究発表ができたのは、一緒に活動する近畿ブロックの皆さまの温かいサポートのおかげです。真摯に研究に取り組む学び合う仲間にも恵まれたことに感謝し、そして、それに恥じないように今後も研鑽を重ねていきたいと思っております。

## 学会奨励賞（研究発表）受賞報告3

高松邦彦（東京工業大学） 松本 清（東京工業大学） 今井匠太郎（東京工業大学）

「Society5.0 の視点から見た実践と理論の結びつき

：Eduinformatics と機関研究をもとにした日本ビジネス実務学の探究」



〔授賞理由〕Eduinformatics（教育と情報学の両方を含む学際的な分野）という新しい学問領域からビジネス実務学にアプローチした点は新規性が高く、参考になる内容であった。今後、ビジネス実務分野へのより具体的な知見に繋げることを期待する。

〔本人感想〕この度は栄誉ある学会奨励賞を賜り、心より感謝申し上げます。IR 哲学と Eduinformatics の観点からビジネス実務学を捉え直す試みが評価されたことを光栄に思います。今後も実践と理論の架橋を目指し、Society 5.0 時代のビジネス実務教育の発展に貢献できるよう研究に邁進します。発表の機会を頂いた大会実行委員の先生方に心よりお礼申し上げます。



大島会長と受賞者の皆様

## 口頭発表概要

[A-1] アフターコロナにおける外部との関りや協力について学ぶ「ショップ運営」～学生の自己評価が示す能力の変化について～

石田もとな（鹿児島女子短期大学）

ビジネスマナーの知識を得ても、実践できなければ力にはならない。「ビジネスワーク」の授業では前期に学んだ知識を生かし、会計・統括・広報・企画・交渉の5部署に分かれ2店舗の運営を行うことを通して、知識を能力に変える試みを行った。また、コロナ禍において外部と接する機会を得ることが困難であった学生達が外部と接する機会を得られるよう授業を行った結果、この授業における自身の果たした役割について語り、就職活動において成果を出した学生もいた。自分の果たした役割についての認識を明確化するため、学生に授業開始時と授業終了時の2回、同じフォームを用いて能力の自己評価をしてもらい、それを比較することで、学生の能力に関する認識がどのように変わるのかについての調査を行った。規律性などの個人の元々の資質が大きく影響する部分の変化は少なかったが、主体性・働きかけ力等は実践を通して変化したと自らの成長を認識した学生が多かった。

[A-2] 新しい三省合意に対応する「タイプ 2」型産学連携教育の実践

吉川正剛(大手前大学)

大学におけるインターンシップのガイドラインとなってきた「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（三省合意）が2022年に改正され、インターンシップの定義は大幅に改められた。そこで、従来の「インターンシップ」（現行では「タイプ2」）に相当する新規授業科目を設計・実践した。この授業を特徴づける2つの取組は、企業から提出してもらった課題にグループで回答をだすこと、15社の取材先に1～2名で取材を行い、「企業ガイド」を作成することであった。学生からは「この授業を通して、将来の自分の進路を現実的に考える良いきっかけを得ることができた」など好意的なフィードバックがあり、企業からもおおむね好評であったが、収集できたデータが極めて少なかったため、この授業が効果的であった、成果があったと評価するには不十分である。この授業の実践を継続していく中でさらにデータを収集し、企業のニーズに対応する授業プログラムの設計・開発につなげたい。

[A-3] 短期大学生におけるアクティブラーニング型授業での学修成果について

上岡史郎（目白大学短期大学部）

アクティブラーニングとは、学修者の積極的な授業への参加を促す授業や学習法である。アクティブラーニングを活用した学習は、他者の意見を積極的に取り入れ、柔軟に問題解決する能力を伸ばすのに有効とされ、こうした能力は、これからの社会において特に重視される能力であるといえる。本研究では、短期大学における「ボランティア」という基礎教育科目の授業において学生がアクティブラーニングを体験する中で、学修成果がどのように変化したのかについて分析を行った。履修当初の時点では、履修者全員の学修成果に差はなかった。しかし、ボランティア活動を行っていく中で、リーダーはリーダーとしての自覚と責任感から、リーダーとして必要な「主体性」や「発信力」、「ストレスコントロール力」といった学修成果を修得していったことが分かった。一方で、メンバーもリーダー程のスコアの上昇ではないが、12の構成要素中8つの要素でスコアの向上が見られた。これらのことから、アクティブラーニングは学修成果の向上に適した学習方法であるとの結論に至った。

[A-4] 双方向型遠隔教育におけるデザイン思考演習の指導法と成果物の評価

○川瀬真弓（岐阜大学）、森部絢嗣（岐阜大学）、鎌部浩（岐阜大学）

本研究は、理工系大学院生198名を対象に双方向型遠隔教育で実施したデザイン思考演習の効果を検証し、学習者の理解および学習事項の転移への寄与を評価することを目的とした。授業ではMicrosoft Teamsを利用してデザイン思考の基礎理論を習得する機会と、グループでの演習課題を通じてデザイン思考力が向上する機会を提供した。学習者のデザイン思考力の向上を確認するため、演習前後に自由記述により回答するアンケートを実施し、回答の自由記述文をKH Coderを用いて共起分析とコーディング分析を行った。結果、演習後には「共感」、「ペルソナ」、「ニーズ」などのデザイン思考の理解に欠かせない主要語の出現頻度の増加と、「研究場面での使用」などデザイン思考の応用を示す語の出現頻度の増加がみられ、カイ二乗検定により有意な差を確認した。大会では本研究のデザイン思考教育を双方向型遠隔教育で実施した事例紹介とその結果を発表し、今後の教育方法の改善に向けた示唆を提供した。

## [A-5] 学生のキャリア形成と STEAM 教育の連携における課題

森谷一経（開智国際大学）

近年、STEM 教育または STEAM 教育と呼ばれる教育領域ないし手法が注目を集めている。新しいテクノロジーが次々と導入される今日の社会においては、サイエンスを志望する学生だけでなく、文系の学生においても、基礎的な工学的知識を有することは大きな意味を持つ。本発表においては、学生のキャリア形成と STEAM 教育の結びつきに焦点を当て、学生が適切なキャリア選択を行うために必要なスキルや知識の充足、教育プログラムと産業界の連携を念頭に、STEAM 教育の普及に向けたカリキュラムを考えた。学生のキャリア形成には、産業界との連携が重要であるが、現実には学校教育と産業界のニーズが乖離していることも少なくない。だからこそ、教育機関と産業界が連携し、学生に実践的なスキルを提供するプログラムを構築する必要がある。STEAM 教育とキャリア教育の連携を促す教育課程を検討し、学生のキャリア形成と STEAM 教育の連携を促進するための教育内容を考察した。

## [B-1] コミュニケーション能力育成に繋がる敬語教育の考察

杉本あゆみ（元金沢学院短期大学）

本研究では、高等教育機関における初年次学生を対象に、ビジネス実務科目を通じて、予測困難なこれからの時代を生き抜くために必要とされる能力とされる「コミュニケーション能力」、とりわけ「敬語力」の育成を目指し、教員から与えられた目標ではなく、自ら学修目標や学修計画（授業以外の時間における経験学修）を考え、実践し、自身の経験を協働で振り返る時間（協働評価学修）を設ける経験学修モデルを実践した。実践の効果は、客観的尺度として事前事後に実施した敬語テスト、主観的尺度として事前に実施した授業アンケートより測定することとした。調査の結果、定量的データ、定性的データの両方より授業効果を確認することができ、さらに、記述式アンケート結果より、受講学生の「敬語力」が醸成された可能性を確認することができた。

## [B-2] 若手人材が「教える」としてキャリア形成—京都花街芸妓の事例—

西尾久美子（近畿大学）

京都花街の芸妓を事例に、「教える」ことが若手人材のキャリア形成にどのような影響をもたらすのかについて検討する。京都花街では20代半ばの若手芸妓が、新人舞妓の育成指導者の役割（姉芸妓）を引き受けることがよく見受けられる。参加観察調査や聞き取り調査から、「教える・教えられる」というディベロップメンタル・ネットワーク（以下 DN と略す）の構築は、芸舞妓の育成に関わる置屋やお茶屋の経営者が主体になり、新人の育成に加え若手芸妓の成長も期待されて結ばれていることがわかった。そして、姉芸妓になることが、技能の言語化や伝承、仕事の成り立ちの把握と関係者の職務の理解につながっていることが明らかになった。教えることは技能向上に直接的に役立つわけではないが、若手芸妓は「教える・教えられる」という両方の立場の経験を通じて、自分を取り巻く DN を深く理解し、先輩芸妓たちへの共感を育み、技能獲得のプロセスを明確に意識してキャリア選択に関してポジティブな視点を持てるようになっていた。

## [B-3] 女性管理職の「一皮むけた経験」—岩田屋三越の事例研究—

徳永彩子（熊本学園大学）、所吉彦（岐阜共立大学）

本研究は、西鉄・九産交・JR 九州・小売業 A 社・情報通信産業 A 社・サンリブを事例とした先行研究に続き、株式会社岩田屋三越に協力を要請し、同社からの承諾を得て、インタビュー調査を実施した。女性管理職のキャリア形成において、どのような「一皮むけた経験」を経て、現在の地位にたどり着いたのかを探ることを目的とした。M-GTA により分析を行った結果、12 の概念が抽出され理論的飽和が確認された。また、生成された概念から 6 カテゴリーが生成された。具体的には、《a 役割変化による新たな自覚》、《b 権限移譲の認識》、《c メンバー育成関心の高まり》、《d 満足感の感得》、《e 新たな業務割当による刺激》、《f 人事制度によるやる気の維持》、の 6 カテゴリーになった。女性管理職の「一皮むけた経験」内容において、カテゴリーと概念の関係を示す関連図、代表的なストーリーラインにより「動機付け」、「意図的働きかけ」、「必然的遭遇」の内容と出現頻度が確認された。

[B-4] 企業秘書の感情労働にかかわる要因—テキスト分析によるコーディングルールの作成—  
周藤亜矢子(茨城女子短期大学)

本研究では感情労働の概念を用いて秘書職の職務特性や必要な能力、環境要因、感情労働の特徴、感情の管理方法を明らかにし、現代の課題や AI との共存を考察して、秘書やビジネスパーソンの課題や問題に関する情報を提供することを目指す。30代から50代の現役秘書9名に半構造化インタビューを行い、45分から90分間の音声をテキスト化した。先行研究や感情労働尺度日本語版(関谷 2014)を参考に、6つの項目を軸にインタビューを実施した。分析結果として、KH コーダーを使用して共起ネットワークを作成した。初期データでは不自然な語の分かれが見られたため、強制抽出や同義語の設定を行い、ボスと秘書の関係や周囲との関わりを象徴する語が多く出現した。共起ネットワーク機能で語と語のつながりを確認し、対応分析により、上場・非上場、マニュアルの有無、代表権の有無ごとに特徴的な語が確認された。最終的に、心理的距離を表すコンセプトの出現率をクロス集計し、秘書ごとに異なる出現率を確認した。

[B-5] 学問分野と職業能力のチューニングによるビジネス実務の再考  
江藤智佐子(久留米大学)

日本ビジネス実務学会は、1996年の学会名称変更以降、対象となる学校種は短大から大学へとシフトしてきているが、大学教育におけるビジネス実務とは何か。本研究の目的は、大学におけるビジネス実務について、学問分野と職業の双方から横断的に探究することである。関係機関の公表資料等による文献研究の結果、(1) 大学教育におけるビジネス実務を学際的な学問分野として検討する際には、どの学問分野の視座からのアプローチなのか、学問分野の立ち位置を示す必要がある。(2) 科研費審査区分においては、会員の興味関心となる「キャリア教育」は広範かつ多様な学問分野による採択が見られた。(3) 職業分類の観点からビジネス実務を概観すると、秘書教育の流れからは「事務的職業」が対象となるが、「販売・営業の職業」「サービスの職業」「法務・経営・文化芸術等の専門的職業」も対象となることが考えられる。学士課程教育の場合、「管理的職業」も視野に入れた教育プログラムが望まれる。

[C-1] Society5.0の視点から見た実践と理論の結びつき:Eduinformaticsと機関研究を基にした日本ビジネス実務学の探究  
○高松邦彦(東京工業大学)、松本清(東京工業大学)、今井匠太郎(東京工業大学)

Society 4.0 から 5.0 への移行期において、高等教育の機関研究(IR)の役割は急速に進化している。我々は、教育と情報学を融合した「Eduinformatics」を提唱し、IRの理論と実践を架橋する「IR哲学」の概念を提唱してきた。さらに、日本の大学でのIRの分析から、技術スキルと教育文脈の理解の重要性を明らかにしてきた。本研究では、IR哲学を日本ビジネス実務学会の文脈に適用して、Society 5.0時代のビジネス実務におけるIRの役割について考察し、ビジネス実務の実践知と理論知の融合を目指す学際的アプローチの可能性を探る。これは、日本ビジネス実務学会が実践と理論を結びつける学会であることを再確認し、IR哲学という新たな観点からその使命を再考する契機となるかもしれない。本研究が日本ビジネス実務学会とIR分野との学際的交流を促進し、その可能性を引き出すことを期待する。また、この研究を通じて、Society 5.0時代における高等教育とビジネス実務の相互作用を深め、新たな知見と実践モデルの創出につながることを目指す。

[C-2] 大学IRにおけるアンケート調査業務支援:社会心理学に基づく課題の分析と対策の試み  
○松本清(東京工業大学)、高松邦彦(東京工業大学)、今井匠太郎(東京工業大学)

本研究では、大学IRにおけるアンケート調査業務支援の課題について、社会心理学的観点から検討を行った。Society 5.0時代に向けて、大学は学修者本位の教育へ転換を求められ、IRはその基盤の一つとなっている。アンケート調査業務支援において、改善提案が一度は受け入れられても元に戻される「先祖返り」現象に注目し、3つの事例を分析した。提案内容と原案との乖離が大きいほど先祖返りは起こりやすく、認知的不協和や現状維持バイアスの関与が推測された。対策には、原案と提案のつながり・連続性の認識を促すこと、デメリットよりもメリットに焦点を当てて提案によるメリットの優位性を説明することが有効と考えられる。今後も学修成果や教育成果の把握・可視化の技術向上と、教職協働に関する知見の蓄積が必要である。本研究は、IRの実務における課題解決に向けた新たな視点を提供し、学修者本位の大学教育に資することを目指すものである。

### [C-3] 小規模私立大学の教職員におけるデータ活用人材の育成に向けた分析フローの検討

○大須賀元彦(中京学院大学)、富田宏(中京学院大学)、須栗大(中京学院大学)

本研究の目的は小規模私立大学の教職員におけるデータ活用人材の育成に向けた分析フローを検討するために、その事例として中京学院大学の教学 IR 組織における取り組みからデータセットの特性と種類を区分し、それぞれに対応した分析方法や分析結果を解釈する際の注意点、そして分析結果開示後の反応等を整理することである。分析の結果、データ活用人材の育成に向けた分析フローにおいては、事前準備及び調査を実施する際の注意点の明確化、データ分析及び結果の解釈に必要な統計に関する知識の共有、学内に分析結果を公表した後のフィードバックの機会の創出の必要性が示唆された。このフローに対応し、比較的容易な量的データの分析等からはじめ、次いで質的データの抽出、分析、解釈、そして、その結果を組織内に共有する取り組みについて学ぶ機会を OJT に基づき、段階的かつ意図的に設定し、データ活用人材の育成を図ることが小規模私立大学においては求められていると指摘した。

### [C-4] マネーリテラシー教育プログラム開発に向けた展望と課題

○堂野崎融(九州共立大学)、加納輝尚(昭和女子大学)、手嶋慎介(愛知東邦大学)

本研究は、金融リテラシー向上を目指す教育プログラムの開発と課題を明らかにするものである。特に「金融リテラシー検定」学内PRプロジェクトを通じて、ビジネス実務分野での金融知識の重要性を探ることを目的としている。近年の学習指導要領改訂や成年年齢引き下げに伴い、金融教育の重要性が増す中、愛知東邦大学はPBLを取り入れた経済金融教育プログラムを展開し、学生の主体的学びを促進している。具体的には、学生が「金融リテラシー検定」を無料で受験し、その結果を基にPR活動を行うプロジェクトである。この活動により、学生の社会人基礎力やマネーリテラシーが向上した。また、PBLの7ステップに基づく学習プロセスを採用し、課題の確認、問題策定、ブレインストーミング、結果の整理・分類、学習事項の策定、自己学習、発表・討論の各ステップを踏むことで、学生の課題解決姿勢を育成した。しかし、学生の主体的学習には限界があり、さらなる教育手法の導入が今後の課題である。本研究は、体系的かつ実用的な金融リテラシー教育を推進する一助となるもので、多様な教育アプローチの模索が必要である。

### [C-5] 大学間相互連携による地域連携活動に関する共同教育プログラムの検証

○西川三恵子(九州共立大学)、手嶋慎介(愛知東邦大学)、堂野崎融(九州共立大学)、大須賀元彦(中京学院大学)

本研究は、第42回日本ビジネス実務学会で発表された「他大学との相互連携による地域連携活動」の継続検証である。九州共立大学、愛知東邦大学、中京学院大学の学生が参加し、地域社会の課題解決に向けた共同教育プログラムを開発し、その効果をアンケートやインタビューで分析した。越境学習の観点からも検証し、学生が異なる地域や大学との交流で新たな知見を得るプロセスを確認した。地域連携活動では、福岡市の太宰府天満宮や北九州市のTOTOミュージアムを訪れるエクスカージョンを実施し、地域の特性を理解した。参加した学生たちは、自分たちのアイデアを発表し、他大学の学生や教員と交流することで、地域問題解決のアプローチや新たな発見を得た。研究の結果、地域連携活動を通じて学生たちは他地域や異なる背景を持つ学生との交流で多くの学びを得ることが確認された。今後は、より詳細なデータを収集し、質的・量的な分析を通じて教育効果の精密な評価を行うことが課題である。

### [D-1] インターンシップ中に学生が困難を感じる要因とその乗り越え方の分析と考察

牛山佳菜代(目白大学)

近年、インターンシップを取り巻く環境が大きく変化する中で、多くの大学生がインターンシップに参加し、学修の深化への動機付けやキャリア探索等に役立っている。一方、学生がインターンシップに参加している中で生じる現象や課題について触れている研究は少ない。そこで、2022、2023年度に本学で実施したインターンシップを事例として、学生自身がインターンシップ中にどのような困難を感じどのように乗り越えたのかを、報告書(306件)のテキストマイニングを中心に探索的分析を行い、考察した。その結果、学生は、企画、意見をまとめる、社会人とのコミュニケーションを困難と感じつつも、課題解決型インターンシップの場合は、グループ内で意見を出し合う、役割分担、社員からのアドバイス、業務補助型の場合は、社員の行動の模倣、自分の方法を変えるなどによって乗り越えていることが明らかになった。今後は、今回の結果を元に、さらに分析を深めていきたいと考える。

**[D-2]技能実習生制度廃止および育成就労制度新設に対する、今後の外国人労働者と大学生との交流の在り方について**  
見館好隆(北九州市立大学)

2027 年度に予定されている技能実習生制度廃止および育成就労制度新設について、まず旧制度と新制度の違い(「技術移転・国際貢献」から「労働力・人材育成」へ)を踏まえる。次に、外国人労働者の採用や育成の先進的企業の一つである福岡県直方市2社の事例を紐解きつつ、その2社をサポートしている直方市役所・商工会議所の取組みを確認する。最後に、今後の外国人労働者の雇用の在り方についての施策を4つ提案する。1) 採用活動を日本人と同じレベルで行う(現地で数回面接し長期就労の意思確認)。2) 質の高い送り出し&監理支援機関を見極める(現地で日本語学校の質を確認)。3) 外国人労働者に選んでもらえる社内におけるキャリア形成(スキルに応じた賃金アップ、管理職への道など)と日本人と差が無い待遇(会議や社員旅行への参加等)を整備、帰属意識を高める。4) 日本語教育や文化交流などを、地域の自治体と連携して手厚く実施し、地域全体で歓迎する雰囲気を作る。

**[D-3]大学生のリーダーシップ観について:リーダーシップ教育の観点から**  
佐野達(拓殖大学)

近年、我が国ではリーダーシップ教育への関心が増加しており、大学においてもリーダーシップ教育プログラムの導入が進んでいる。本研究では「大学生のリーダーシップ観」の現状を理解することで、環境変化に適応しうるリーダーシップ教育の方向性について検討した。大学生を対象に「優れたリーダーとして思い浮かぶ人物」と「その要件」を5人まで思い浮かべるよう求めた。分析の対象は112名で優れたリーダー人物像のべ498人分である。質的検討の結果、大学生のリーダーシップ観は主に古典的アプローチ、近代的アプローチに基づいていることがわかった。今後のリーダーシップ教育の方向性として、(a) 古典的理論、(b) 近代的理論のみならず(c) 倫理的アプローチ、(d) ポジティブ心理アプローチまでのリーダーシップ理論を体系的に教える必要があること、そして、リーダーシップの有効性はその組織固有のコンテキストに依存するため、組織論の知識とともに学ぶようなプログラムが望ましいことを示した。

**[D-4]新規開講科目「トランジション論」の事例紹介**  
岩井貴美(近畿大学)

本稿では、新規開講科目「トランジション論」の立ち上げにおける背景や問題意識、また、履修した学生が何を学び感じているのかを検討した。大学生は、キャリア発達段階において青年期であり、将来設計をする上で多くの葛藤や困難を乗り越えなければならない。よって、人の成長過程におけるターニングポイントであるトランジションの繰り返しを学び理解する必要がある。特に、就職活動は重要なトランジションであり多くの課題を克服しなければならない。講義の中では、社会人から転職について学び多くの新しい知識や考えを感じながらの学びとなっている。また、グループディスカッションでは、他者のトランジションや将来のキャリアを考える時間となっている。さらに、2年生と3年生の回答を比較すると、3年生は就職活動の時期が迫っているため、より現実的にトランジションの学びを受入れている。就職活動を含めた今後の人生における転職に対して学びを活かしていきたいという気持ちが強いと考える。

**[D-5]生成 AI によるビジネス実務への対応の可能性～ChatGPT による秘書技能検定 3 級問題正答率の分析～**  
樋口勝一(甲子園大学)

今回の発表では、まず、先行研究等を整理した。これまで、医師、司法試験、公認会計士、一級建築士、管理栄養士の国家試験についての回答事例が報告されている。さらに、本研究ではビジネス実務内容を大きく包含する秘書技能検定3級について、近年実施された5回分の正答率の調査をした。その結果、「常識や知識を問うビジネス実務問題において、GPT-3.5はある程度の対応能力を有している」こと、『人間関係』『敬語』など、日本人特有の文化や慣習に関する問題が含まれる『IVマナー・接遇(択一)』分野はGPT-3.5が苦手としていて、まだ十分な対応が難しいことを推定した。総じて、GPT-3.5はビジネス実務において基本的な知識や理解を持ちつつも、文化や人間関係に関する日本特有の要素には改善の余地があると結論づけた。

## 2024 年度総会報告

本年度は6月8日(土)、2024年度総会が開催され、以下の報告、審議が行われました。出席56名、議長委任115名、会員委任1名、計172名であり、議決権を有する2024年6月1日現在の正会員(一般会員・シニア会員)284名の1/3超となり、総会は成立しています(会則第15条第2項)。

### 【報告事項】

#### 1. 総務・企画委員会(総務・企画委員長)

##### 2023年度活動報告

- ・第44回(2025年度)全国大会の検討  
日時:2025年6月7日(土)~8日(日) 予定  
場所:未定  
担当:関東・東北ブロック
- ・ビジネス実務研究助成の応募者確保施策  
共同研究(A)1件、個人研究(B)3件
- ・国際交流研修会の検討 →当面見送る方向
- ・会員ニーズに沿ったセミナーの開催 →会員からの意見聴取

#### 2. 研究推進委員会(研究推進委員長)

##### ① 2023年度活動報告

- ・第42回(2023年度)全国大会の開催(近畿ブロック) 研究発表:20件(うち学会奨励賞エントリー7件)
- ・2023年度ビジネス実務研究助成の採択  
共同研究(A)1件  
松崎陽子、薄葉祐子、佐藤美輪(仙台青葉学院短期大学)「女性労働者の躍進における潜在的な阻害要因を探る」  
個人研究(B)2件  
吉川正剛(福島大学)「キャリアコンサルティング方略の可視化によるキャリアコンサルタントー相談者間のコミュニケーション分析ー」  
後藤和也(山形県立米沢女子短期大学)「新規学卒予定者における就職活動不安とソーシャルサポートが就職活動に及ぼす影響」
- ・2023年度学会奨励賞(発表の部) 審査結果(学会賞選考委員長)  
第42回全国大会での口頭発表につき、学会奨励賞(発表の部) 候補が選考委員会から推薦され、理事会にて承認された。  
発表者:町田由徳(ものづくり大学)  
発表テーマ:渋沢栄一プロジェクトーPBLによるデザイン思考教育についてー(A会場第2セッション)  
発表者:武村順子(宮崎学園短期大学)  
発表テーマ:中小規模医療機関における医療系事務職人材の職務満足度調査からの提言ー人材の

有効活用を視点においた検討ー(B会場第1セッション)

##### ② ブロック研究会活動報告

- ・北海道ブロック:2024年3月3日(日)、対面開催(北海商科大学)、参加者11名、研究発表2件、勉強会テーマ「時代の変化における社会変化と最新ビジネス」として2つの講演(①「多様性が求められる時代のジェンダーとキャリア形成」講師:川名早苗氏、②「ヤフービックデータの公共領域、ビジネス領域での利活用について」講師:兵頭安昭氏)
- ・関東・東北ブロック:2024年2月17日(土)、対面開催(目白大学・目白大学短期大学部)、参加者26名、パネルディスカッション「人材育成と能力開発」、研究発表1件・実践事例報告1件、全国大会奨励賞受賞報告1件
- ・中部ブロック:2024年2月22日(木)~23日(金)、オンライン開催(Zoom)、参加者29名、研究発表4件、学生発表3件、シンポジウム「大学教育における教学IRの役割」
- ・近畿ブロック:2024年2月18日(日)、対面開催(近畿大学東大阪キャンパス)、参加者数24名、研究助成報告2件、研究発表2件、研究会「昨今の就活事情と若者の就業感の変化」講師:栗田貴祥氏
- ・中国・四国ブロック:2023年8月26日(土)~27日(日)、対面開催(四国大学交流プラザ)、研究発表4件、ゲストスピーカー講演「大学と社会:ガラパゴス日本」、第18回学生プレゼンテーション大会(参加学生10名)
- ・九州・沖縄ブロック:2024年2月24日(土)、オンライン開催(Zoom)、研究発表3件、基調講演&グループワーク「生成系AIの授業活用の可能性」講師:堺勝信氏

#### 3. 編集委員会(編集委員長)

##### ① 2023年度活動報告

- ・ビジネス実務論集No.42 発行

研究対象領域	区分	申込件数	投稿件数	採用
【1】ビジネス実務教育 (教育開発)	論文	4	4	1
	研究ノート	2	2	3
	資料	2	2	2
【2】ビジネス実務研究 (理論・調査)	論文	6	6	1
	研究ノート	1	2	1
	資料	2	1	2
区分別件数	論文	10	10	2
	研究ノート	3	4	4
	資料	4	3	4
特別寄稿	報告	—	—	1
合計		17	17	11
No.41の合計		12	10	4

##### ② 2023年度学会賞・学会奨励賞審査結果

- ・「学会奨励賞」(2024年6月7日付理事会にて承認)  
著者:柳田健太氏(近畿大学)  
題目:「中小企業のIT経営推進に向けた意思決定プロセスに関する研究ー経営者へのインタビュー調

## 査の分析ー」

著者: 湯口恭子氏 (近畿大学)

題目: 「ロールモデルが大学生のキャリア探索に与える影響ー家族や友人・知人と、著名人・架空の登場人物とを比較してー」

### 4. 広報委員会 (広報委員長)

#### 2023 年度活動報告

・ウェブサイト運用の外部委託を、2023 年 12 月から開始。委託会社の支援を得て、セキュリティーの高い新ドメインに移行。2024 年 4 月からは、新ドメインのみでの運用を開始。(旧サーバーは同 3 月末で契約解除)。また、記事掲載に関する作業を委託したことによって、掲載依頼を受けてから迅速な対応が可能となっている。

・学会報 No. 79 (2023 年 9 月末) の発行  
<https://www.jsabs.gr.jp/wpcontent/uploads/79%E5%8F%B7%E3%83%BB%E6%9C%80%E7%B5%82%E7%A8%BF.pdf> 参照

・学会報 No. 80 (2024 年 3 月末) の発行  
<https://www.jsabs.gr.jp/wpcontent/uploads/%E4%BC%9A%E5%A0%B180%E5%8F%B7%E6%9C%80%E7%B5%82%E7%A8%BF.pdf> 参照

### 5. 2023 年度会費納入状況 (事務局長)

	会員数	納入者	納入率
正会員 (一般)	261	229	87.7%
正会員 (シニア)	23	22	95.7%
学生	6	3	50.0%
賛助	6	4	66.7%
計	296	258	87.2%

※2022 年度納入率は 81.5%

### 6. 会員数の推移 (事務局長)

	正会員 (一般)	正会員 (シニア)	学生会員	賛助会員	名誉会員	計
2022 年度末 (2023/4/30)	273	21	7	7	8	316
入会	6	0	1	0	0	7
会員種別変更 (増加)	0	3	0	0	0	3
会員種別変更 (減少)	△3	0	0	0	0	△3
退会	△15	△1	△2	△1	0	△19
2023 年度末 (2024/4/30)	261	23	6	6	8	304

※退会理由は、本務校の定年退職とする場合が多い。

### 7. 2023 年度理事会等開催状況 (事務局長)

- ・2023 年度評議員会 2023 年 6 月 9 日 (金) 16:00 - 17:00 2022 年度決算、2023 年度活動計画、2023 年度予算など
- ・第 1 回理事会 2023 年 6 月 9 日 (金) 15:00 - 16:00

### 2023 年度活動計画、2023 年度予算など

- ・第 2 回理事会 2023 年 12 月 23 日 (土) 10:00 - 11:30 (ZOOM) 各委員会活動報告、第 42 回全国大会報告、第 43 回全国大会実施方針、ビジネス実務研究助成審査
- ・第 3 回理事会 2024 年 3 月 20 日 (水) 18:00 - 19:30 (ZOOM) 各委員会活動報告、第 42 回全国大会進捗状況など
- ・E 理事会 (全 9 回)
  - 第 1 回 2023 年 8 月 29 日 (火) 入会審査
  - 第 2 回 2023 年 10 月 19 日 (木) 学会 Web サイトの管理運営委託について
  - 第 3 回 2023 年 11 月 23 日 (木) 学会オンラインセミナーの実施について
  - 第 4 回 2024 年 1 月 21 日 (日) 第一号通信について
  - 第 5 回 2024 年 2 月 7 日 (水) ビジネス実務助成について
  - 第 6 回 2024 年 2 月 26 日 (月) 入会審査
  - 第 7 回 2024 年 3 月 7 日 (木) ビジネス研究助成 共同申請の再申請について
  - 第 8 回 2024 年 4 月 15 日 (月) 入会審査
  - 第 9 回 2024 年 4 月 19 日 (金) 入会審査

### 【審議事項】

1. 2023 年度決算 (収支決算書・貸借対照表) 報告 (事務局長) 【p.16 参照】
2. 2023 年度監査報告 (監事)
3. 2024 年度収支予算 (案) (事務局長) 【p.16 参照】
4. 会則変更及び規程の改廃 (総務企画委員長)
  - ・第 4 条 (会員) 顧問の選任に関しては別に定める。
  - ・第 5 条 (所在地) 東京都中野区本町 2-9-5 東京工芸大学内
  - ・名誉会員規程及び顧問規程の改廃
5. 顧問の推薦 (総務企画委員長)
  - ・池内 健治 (元会長・自由が丘産能短期大学)
  - ・椿 明美 (元会長・札幌国際大学)
  - ・米本 倉基 (前会長・東海学園大学)

以上、審議事項の全てが承認されました。

# 2023 年度収支決算・2024 年度収支予算・2023 年度貸借対照表

## 2023年度 収支決算書

(2023年5月1日～2024年4月30日)

(単位:円)

収入の部	大科目	中科目	決算(2022年度)a	予算(2023年度)b	決算(2023年度)c	差異c-a
基本財産運用収入			( 86 )	( 86 )	( 88 )	2
		基本財産利息収入	86	86	88	2
会費収入			( 2,858,000 )	( 2,750,000 )	( 2,609,000 )	△ 141,000
		会員会費収入	2,508,000	2,500,000	2,409,000	△ 91,000
		賛助会員会費収入	350,000	250,000	200,000	△ 50,000
事業収入			( 0 )	( 200,000 )	( 40,000 )	△ 160,000
		セミナー収入	0	200,000	40,000	△ 160,000
		学会誌等販売収入	0	0	0	0
助成金収入			( 500,000 )	( 500,000 )	( 500,000 )	0
		経常費協力金(JAICB)	500,000	500,000	500,000	0
雑収入			( 500,000 )	( 500,000 )	( 1,700,000 )	1,200,000
		全国大会貸付返戻金	500,000	500,000	500,000	0
		全国大会余剰金	0	0	0	0
		その他の収入	0	0	1,200,000	1,200,000
当期収入合計(A)		( 3,858,086 )	( 3,950,086 )	( 4,849,088 )	899,002	
前期繰越額(B)		( 9,224,348 )	( 10,561,331 )	( 10,561,331 )	0	
収入の部合計(C)		( 13,082,434 )	( 14,511,417 )	( 15,410,419 )	899,002	

支出の部	大科目	中科目	決算(2022年度)a	予算(2023年度)b	決算(2023年度)c	差異c-a	
事業費			( 2,307,891 )	( 2,900,000 )	( 2,419,165 )	△ 480,835	
		大会関連費	188,267	300,000	333,613	33,613	
		大会貸付金	500,000	500,000	500,000	0	
		編集発行費	839,224	500,000	660,600	160,600	
		J-STAGE登録代行料	66,000	100,000	132,000	32,000	
		学会賞資金	0	50,000	0	△ 50,000	
		学会奨励賞資金	10,000	50,000	20,000	△ 30,000	
		ブロック研究会補助金	644,400	600,000	594,000	△ 6,000	
		セミナー開催費	0	200,000	18,952	△ 181,048	
		ビジネス実務研究助成金	60,000	400,000	160,000	△ 240,000	
		緊急プロジェクト助成金	0	0	0	0	
		国際交流研究会助成金	0	200,000	0	△ 200,000	
	事務管理費			( 213,212 )	( 950,000 )	( 557,584 )	△ 392,416
			広報費(経常関連学会協議会会費)	30,000	50,000	30,000	△ 20,000
			会議費	23,958	50,000	33,480	△ 16,520
			旅費交通費	0	500,000	140,000	△ 360,000
			人件費	39,362	50,000	16,800	△ 33,200
		通信費	92,516	150,000	320,430	170,430	
		印刷費	0	10,000	0	△ 10,000	
		消耗品	24,571	50,000	13,079	△ 36,921	
		事務局移転費	0	50,000	0	△ 50,000	
		雑費	2,805	40,000	3,795	△ 36,205	
子備費			( 0 )	( 100,000 )	( 0 )	△ 100,000	
子備費		0	100,000	0	△ 100,000		
当期支出合計(D)		( 2,521,103 )	( 3,950,000 )	( 2,976,749 )	△ 973,251		
当期収支差額(A)-(D)		1,336,983	86	1,872,339	1,872,253		
次期繰越額(E)=(C)-(D)		( 10,561,331 )	( 10,561,417 )	( 12,433,670 )	1,872,253		
支出の部合計(D)+(E)		( 13,082,434 )	( 14,511,417 )	( 15,410,419 )	899,002		

## 2024年度 収支予算(案)

(2024年5月1日～2025年4月30日)

(単位:円)

収入の部	大科目	中科目	予算(2023年度)a	決算(2023年度)b	予算(2024年度)c	差異c-a
基本財産運用収入			( 86 )	( 88 )	( 88 )	2
		基本財産利息収入	86	88	88	2
会費収入			( 2,750,000 )	( 2,609,000 )	( 2,600,000 )	△ 150,000
		会員会費収入	2,500,000	2,409,000	2,400,000	△ 100,000
		賛助会員会費収入	250,000	200,000	200,000	△ 50,000
事業収入			( 200,000 )	( 40,000 )	( 200,000 )	0
		セミナー収入	200,000	40,000	200,000	0
		学会誌等販売収入	0	0	0	0
助成金収入			( 500,000 )	( 500,000 )	( 500,000 )	0
		経常費協力金(JAICB)	500,000	500,000	500,000	0
雑収入			( 500,000 )	( 1,700,000 )	( 1,000,000 )	500,000
		全国大会貸付返戻金	500,000	500,000	500,000	0
		全国大会余剰金	0	0	0	0
		その他の収入	0	1,200,000	500,000	500,000
当期収入合計(A)		( 3,950,086 )	( 4,849,088 )	( 4,300,088 )	350,002	
前期繰越額(B)		( 10,561,331 )	( 10,561,331 )	( 12,433,670 )	1,872,339	
収入の部合計(C)		( 14,511,417 )	( 15,410,419 )	( 16,733,758 )	2,222,341	

支出の部	大科目	中科目	予算(2023年度)a	決算(2023年度)b	予算(2024年度)c	差異c-a	
事業費			( 2,900,000 )	( 2,419,165 )	( 3,000,000 )	100,000	
		大会関連費	300,000	333,613	400,000	100,000	
		大会貸付金	500,000	500,000	500,000	0	
		編集発行費	500,000	660,600	700,000	200,000	
		J-STAGE登録代行料	100,000	132,000	150,000	50,000	
		学会賞資金	50,000	0	50,000	0	
		学会奨励賞資金	50,000	20,000	50,000	0	
		ブロック研究会補助金	600,000	594,000	550,000	△ 50,000	
		セミナー開催費	200,000	18,952	200,000	0	
		ビジネス実務研究助成金	400,000	160,000	400,000	0	
		緊急プロジェクト助成金	0	0	0	0	
		国際交流研究会助成金	200,000	0	0	△ 200,000	
	事務管理費			( 950,000 )	( 557,584 )	( 1,200,000 )	250,000
			広報費	50,000	30,000	50,000	0
			会議費	50,000	33,480	50,000	0
			旅費交通費	500,000	140,000	500,000	0
			人件費	50,000	16,800	50,000	0
		通信費	150,000	320,430	400,000	250,000	
		印刷費	10,000	0	10,000	0	
		消耗品	50,000	13,079	50,000	0	
		事務局移転費	50,000	0	50,000	0	
		雑費	40,000	3,795	40,000	0	
子備費			( 100,000 )	( 0 )	( 100,000 )	0	
子備費		100,000	0	100,000	0		
当期支出合計(D)		( 3,950,000 )	( 2,976,749 )	( 4,300,000 )	350,000		
当期収支差額(A)-(D)		86	1,872,339	88	2		
次期繰越額(E)=(C)-(D)		( 10,561,417 )	( 12,433,670 )	( 12,433,758 )	1,872,341		
支出の部合計(D)+(E)		( 14,511,417 )	( 15,410,419 )	( 16,733,758 )	2,222,341		

## 2023年度 貸借対照表

(2024年4月30日現在)

(単位:円) △は前年度減を示す

I 資産の部			
科 目	前年度末	本年度末	増減
固定資産	( 10,000,518 )	( 10,000,606 )	( 88 )
基本財産積立預金	5,000,259	5,000,303	44
研究推進準備金	5,000,259	5,000,303	44
流動資産	( 10,561,245 )	( 12,433,496 )	( 1,872,251 )
現金	0	0	0
預金	10,561,245	12,433,496	1,872,251
資産の部合計	20,561,763	22,434,102	1,872,339
II 負債の部			
科 目	前年度末	本年度末	増減
固定負債	( 0 )	( 0 )	( 0 )
流動負債	( 0 )	( 0 )	0
未払金	0	0	0
負債の部合計	0	0	0

III 正味財産の部			
科 目	前年度末	本年度末	増減
基本財産積立預金	5,000,259	5,000,303	44
研究推進準備金	5,000,259	5,000,303	44
翌年度繰越貯金	10,561,245	12,433,496	1,872,251
正味財産の部合計	20,561,763	22,434,102	1,872,339
科 目	前年度末	本年度末	増減
負債および正味財産合計	20,561,763	22,434,102	1,872,339

預金内訳	
ゆうちょ銀行振替口座	7,631,034
ゆうちょ銀行総合口座	4,802,462
ゆうちょ銀行通常貯蓄貯金口座	10,000,606
	22,434,102

## 2023・2024年度 役員体制

### ■常任理事

大島武（東京工芸大学）会長 総務・企画  
坪井明彦（高崎経済大学）副会長 総務・企画 編集  
関東・東北ブロックリーダー  
手嶋慎介（愛知東邦大学）副会長 編集委員長 総務・企画  
千葉里美（北海商科大学）総務・企画 編集 広報  
北海道ブロックリーダー  
小松由美（目白大学短期大学部）研究推進委員長  
総務・企画  
河合晋（岐阜協立大学）総務・企画委員長  
中部ブロックリーダー  
坂本理郎（大手前大学）広報委員長 総務・企画

### ■理事

牛山佳菜代（目白大学）編集  
上岡史郎（目白大学短期大学部）研究推進  
後藤和也（米沢女子短期大学）編集 広報  
樋口勝一（甲子園大学）研究推進  
岩井貴美（近畿大学）広報  
近畿ブロックリーダー  
湯口恭子（近畿大学）編集  
福井就（大手前学園）研究推進 広報  
堀口誠信（徳島文理大学短期大学部）広報  
金岡敬子（山陽女子短期大学）編集  
中国四国ブロックリーダー  
名和晋也（鳥取短期大学）研究推進 広報  
見舘好隆（北九州市立大学）九州・沖縄ブロックリーダー  
加納輝尚（昭和女子大学）事務局長 総務・企画

### ■監事

大塚映（BSCM 総合研究所）  
西川三恵子（九州共立大学）

### ■評議員

和田早代（札幌国際大学短期大学部）  
齋藤裕美（多摩大学）  
岡野大輔（金城大学）  
苺野正美（元プール学院短期大学）  
高松直樹（大阪樟蔭女子大学）  
高松邦彦（東京工業大学）  
片山友子（四国大学短期大学部）  
立花知香（安田女子大学）  
石橋慶一（中村学園短期大学）

## 新入会員会員紹介（2024年1月～6月）

北岡昭子（近畿大学九州短期大学）  
正会員（一般）九州・沖縄  
松井広美（目白大学）  
正会員（一般）関東・東北  
平田道彦（志学館大学）  
正会員（一般）九州・沖縄  
橘野実子（東京工芸大学）  
正会員（一般）関東・東北  
大谷禮子（金城大学短期大学部）  
正会員（一般）中部  
大塚敬義（目白大学）  
正会員（一般）関東・東北

## 事務局からのお知らせ

### ■領収書の発行

ご所属機関で必要と認められる場合を除き、領収書の発行は行っていません。会員への個別対応は、事務局の業務量とコストの増大に繋がりますので、ご理解賜りますようお願いいたします。

## 第44回（2025年度）全国大会のご案内

### ■関東・東北ブロック主催

■会場：目白大学・目白大学短期大学部  
日程：2025年5月31日（土）～6月1日（日）

### ■統一テーマ：

「企業におけるビジネス実務教育一人材育成の取り組みと課題」

### ■実行委員：

実行委員長：坪井明彦（高崎経済大学）  
大会事務局長：上岡史郎（目白大学短期大学部）

## 日本ビジネス実務学会会報 No. 81

日本ビジネス実務学会 広報委員会  
（坂本理郎・後藤和也・岩井貴美・福井就・堀口誠信・名和晋也）

広報委員長（坂本）e-mail：riro-s@otemae.ac.jp

JSABs  
Japan Society of Applied Business Studies